

# ホリスティックな教育実践

思春期の自尊感情を育む参加型学習

金 香百合

(大阪YWCA教育総合研究所所長)

**司会** 「ホリスティックな教育実践」と題して金香百合さんをお迎えして研究会を持ちたいと思います。「ケア新時代対人援助のフロンティアと臨床の知」は人間科学研究所の学術フロンティアのテーマの一つの具体化です。いろんな分野で対人援助やヒューマンサービスの活動が活発化しつつあり、時代の課題ではないかと思っています。それにふさわしい方を外部から招いて勉強会をするシリーズです。昨年未までは児童虐待、少年非行、障害の形で最先端の議論を学び合いました。年が開けてからご案内の企画になっています。

私も金さんからいろんなことでアイデアをいただいています。3週間前、大阪YWCAでプログラムを開催しました。対人援助の諸相として今日は「思春期の自尊感情を育む参加型学習」です。この研究会自身が参加型になっていくと思いますので期待しているところです。よろしくお願いします。

## [ 対人援助者とは ]

こんばんは。ご紹介をいただきました金と言います。中村正さんによると私は「ようしゃべる人や」ということで、今日は、自分一人でしゃべりすぎないで、皆さんからの質問を受ける時間をつくりたいと思います。

今日のプログラムは対人援助者であることが一つのキーワードだと思います。自分自身が対人援助者として現場にいらっしゃる方もあるかもしれませんが、これから対人援助者として現場で人をサポートしていこうと思っている人もいるかもしれません。サポートしている対人援助者のことを研究しようと思っている方もあるかもしれません。対人援助者にとって必要なこと、それは「人間を理解する」

ということに尽きる、私はそう思うんです。対人援助者は人にかかわるのが仕事です。人間にかかわるのはエネルギーがいるし、疲れたり、傷ついたりすることもあります。にもかかわらず対人援助者が役割を果たしていこうと思うなら、人間を理解することがとても大事です。たとえば数学の教師が「数学は好きやけど人間のことは好きと違う」というなら、対人援助者としての教師の役割は果たせません。数学の教師であれ、英語の教師であれ、理科の教師であれ、その専門性以前の問題として人間に対して関心がある、理解がある、それにかかわっていこうとする意思がある、ということが対人援助者の基本的なスタンス、立ち位置だと思えます。

人間理解が大事やといっても人間は複雑で多岐にわたりますから、理解するなんてそうそう簡単にできません。でも対人援助者にとってはこういうものを手掛かりにして人間理解をしていくことができます。それは「自分を知る」という作業です。ところが自分を知る作業と聞くと、日本の社会の中ではこういうイメージを持つ方が多い。「自分を知るという作業、しんどいな、いやだな」というイメージです。日本の社会では自分を見つめる、自分を知る作業は自分のことを批判的に厳しく見るというイメージが持たれています。就職活動の前の「自分を知る、自己分析が大事だ。自分のことを厳しく見て洗いざらい分析する」というイメージです。でもここで私が言いたい自分を知る作業はこういうやり方ではありません。「自分のことをあたたかく大切な存在として見つめる」という作業です。

自分のことをあたたかく大切に見つめるという見つめ方をしている時、対人援助者は他の人に対してもあたたかく大切に見つめていくことができるんです。人間はとても単純かつシンプルなところがあります。自分に対してできることだけが人に対してもできる。自分に対して厳しく批判的な人は他人に対しても厳しく批判的です。私は対人援助者にかかわる実践や研究をされる皆さんにぜひ自分のことをあたたかく大切な存在として見つめること、大事にいとおしみながら見守ることを考えていただきたいと思えます。

## [ 自分のことが好きですか ]

自分を見つめる作業の中で私はこういうキーワードに出会いました。「自分のことが好きですか?」。皆さん、どうでしょう。ご自分のことは好きですか。「自分のことを好きやない」という人も多いかもしれません。我々の社会は自己否定に満ち溢れていると思います。多くの人は「自分のことなんか好きやない。そんなの考えたこともない」と答えます。私は自分が好きということにとてもこだわってきたんです。私自身が、自己否定的な子ども時代を生きてきたからです。自分のことを好きやと思える気持ちを「自己肯定感情」と言います。自分のことを「よし」と思える、「OK」と思える自己肯定感情は、心理学の世界では「自尊感情」と言われます。教育の世界その他では「self-esteem」と紹介されることもあります。今日は自己肯定感情で統一したいと思います。

## [ 私の思春期 ]

私は自己肯定感情がとても低い子どもでした。私自身の思春期を思い出すと、とても自己否定的な自分がありました。子どもの頃の私の心の中を覗いてみると、劣等感で一杯やったんです。いろんな劣等感がありました。私には日本人に生まれなかったことがとても嫌なことで恥ずかしいことでした。私は在日韓国・朝鮮人の三世として生まれました。最初の経験は5歳の時でした。大人の人からこんなふうに言われました。「お前は朝鮮人やで。日本人とちゃうねんで」。5歳の時ですからわけもわからなかった。感覚的にわかったのは「うれしいことを言われたのではない。私は皆と違って、何か恥ずかしいのかもしれない。だめなんかもしれない。あかんのかもしれへん」。そんなふうなもやもやした気持ちを持ちました。子どもの時の私にとって皆と同じであることはとても大事なことで思っていました。にもかかわらず、私は皆と同じ日本人に生まれなかった。嫌なこと、恥ずかしいことと思えて、そのことは触れてほしくないことと心の奥に隠していました。

私は子どもの時から耳がよく聴こえなかったんです。高度の難聴でした。クラ

スの中では一番前に座って、一生懸命集中して聴くのですが、それでも聴こえないことがしばしばありました。恥ずかしいから「聴こえない」とよう言わなかったんです。聴こえないということは私にとって「皆と同じじゃない、私の耳は皆と同じようによく聴こえなくて、恥ずかしくてだめな耳や」と思えたんです。

私の家庭が複雑だということも嫌なことでした。私にとって皆と同じということは家の中に遅いお父さんがおって、優しいお母さんがおって、お利口さんな子どもたちがおって、絵に描いたような幸せなファミリーが家庭やと思っていました。でも私の家を振り返るとお父さんがいませんでした。うちのお父ちゃんは私が8歳の時に家を出たんです。他に好きな人ができて。私は8歳で弟は4歳でした。その日のことをとてもよく覚えているんですね。その経験から今も思います。子どもはどんなに小さくてもその体験していること、出会っていることを言葉にはようしないことは一杯あるけれども、いろんなことを受け止めて傷ついたり、考えこんだり、悩んだりいろんなことをしている。大人になってしまってから、大人は勝手に言います。「子どもやからわかってへん。すぐ忘れるって」。そんなふうに私は思わない、自分の経験から、子どもは身体は小さくてもいろんなことを心の中に、身体の中に受け止めながら生きているって思います。

父が家を出ていった後、母は自分が産んだ4人の子どもと夫が愛人との間につくった子どもを引き取り、合わせて6人の子どもを自分一人で働いて食べさせて学校に行かせてたんです。すごいことです。私なんかようしません、そんなこと。すごいことをした人ですが、でも子どもの時、そういう母親を大事に思い、尊敬したかという、そんなふうにはできませんでした。私は自分のことで精一杯やったんです。まるで心の中に氷が一杯のようだったんです。それを抱えて母を大事にするどころか、悪態をつくことがしょっちゅうでした。「お母ちゃん、私はな、こんな家に生まれたなかつたわ。こんな貧乏たらしの家に。どうせ生まれてくるならもっとお姫様みたいにパーッと幸せを絵に描いたような、ええ家に生まれたかつたわ。なんでこんな家に産んでくれたん。産んでくれなんて頼んだ覚えもないのに」。そんなふうには悪態をつくことがしょっちゅうありました。

私の心の中は氷だらけになっていて、中学生、高校生の頃、心の温度が冷えてたんです。マイナス100度とか200度に。ある時に、私の気持ちを表現したくて

「私の心はマイナス500度」と言うと、「金さん、237度以下にはなりません」と言うた先生がおってね、アホと思いましたので、あれ以来マイナス200度以上には言わへん。私の気持ちとしてはマイナス500度にも1000度にも冷えている状態やったんです。心が冷えている時って、人間って表情がなくなるんです。うれしいことがあった。「そう、よかったね」。悲しいことがあった。「そう、残念やったね」と言いながら、口では言うてるけど、気持ちはついていかへんです。表情はなくなるし、感情の起伏はなくなるし、「何でもええやん」という感じです。

しかもその頃、私にこんな癖が身についてきました。腕を組む、足を組む、うんと小さい子どもはそんなのしませんよ。中学、高校生の頃、これ全身で自分を守っているんです。今でも私の癖です。真っ直ぐ見るのが嫌なんです。よう見ないんです、ものごとを。斜めに構えて見る。ほんまにその通りです。いつも心の中で斜めに構えて「対人援助者？そんなことやろうとしている大人なんか、何を優しそう顔、外側だけしているけど、人間なんか心の中は自分のことしか考えてへん。ほんま、外づらだけ優しそうにしやがって」。こんなん思うて生きてましたよ。今頃、こんな中学生、高校生によく会うんです。ようけ会います。そのたびに思います。「ああ、私と一緒にやなあ」って。前、学校の大きな研修会に行きました。500人も先生がいてはる。真正面に座った先生がずっとこんな態度でした。この先生も私と一緒にやったんなや。「心が冷えて固まってはんねんな」と思っていました。

それでも友だちがおったんです。友だちがよう言うてくれた。「金ちゃん、そんな恰好やめとき。もっと素直に前向きに物事を考えや。そんなんやって生きてたら人生暗いだけやで。友だちもでけへんで」と一生懸命言うてくれた。そう言われて素直に聴いたか。そんなもん、聞きますかいな。ますますねじれて「ほっといてえや。どうせ私の人生やから。このまま暗いままいくだけや。人間なんか変わられへんねん。生まれつきこうやし、死ぬまでこうやねん、ほっといて」。でも内心は「変われたらいいな。変わるもんやったら生まれ変わりたい」と思っていた。でも「変わられへんねん。こんな生き方しかできへんねん」と思っている子どもでした。

自分でもしんどくしてしようがなかった。全身、まるごと氷になっていたんで

すね。このまま生きてたらしんどかったです。でもラッキーなことに私には氷の状態を溶かしてくれる人たちとの出会いがありました。YWCAという変わった名前の団体に就職しました。よう知らなかったから就職したんです。行ってみてびっくりしました。私の一番嫌いなもん、福祉とか平和とか人権とかキリスト教まで入っていた。今でも覚えているんです。大学は関西学院大学に行ったんです。キリスト教が必修で最初の時間にレポート用紙配られて「宗教について考えることを書きなさい」と。そのレポートにガーンと書いたんです。「私は宗教なんか大嫌い。宗教のためにどれだけ宗教戦争で人を殺戮することが起こっているか」。それくらい宗教とか大嫌いやったのに、よう知らんと入ってみたら、ここがそれやったんです。若い女性が集まってキリスト教の精神でボランティアの活動をやっている団体。そこに職員として入りました。ラッキーなことやったんです。私は国籍も違うし、家庭も複雑やし、女やし。「就職なんかできへん」とハナからとくに諦めていましたから。

そこで出会った人たちが一貫して私をアツためてくれる人たちやったんです。「あるがままのあなたでいいのよ」というメッセージを一杯くれた人たちやったんです。あるがままのあなたがいい。友だちは一生懸命考えながらも、私に言うてくれた言葉は「あんたそうやったらあかんで。金ちゃん、もうこうあるべきやで。もっと素直に前向きになりいや」と一生懸命、こうあるべき私を説教してくれていた。言われても「そんなんできへん」とますます心を閉ざしていった。YWCAでは、私はひねくれて「この人ら、気持ち悪いわ。何が福祉や、平和や、こわぁ」と思いながら見ていた。その時、「金ちゃん、金ちゃん、それでいいのよ。人間なんてそんな一杯あるねん。居直りたいとか、疑いたい時一杯あんねんから」。何がええのかなと思った。そんな言われたことなかったもの。「ひねくれてくる子どもを見たら大人は『そんなんしてたらあかんやないか』とアドバイスせんといかんやないか」と思ったりしました。人間って複雑ですな。「それでええねん、人間ってそういう時もあんねんから」と初めて言われた時は何か変な感じがしたんです。「この言葉、どない受け止めたらええのん」。でも一貫して言われ続けました。1年も2年も3年も4年も5年も。「あるがままのあなたでOKなんよ。そういう金ちゃんが好きなんや。私たちそういう金ちゃんと一緒に仕事をす

るのがうれしいんや』。そんな言葉をもらい続けているうちに、ゆっくりゆっくり私の中で氷が溶けていったんです。

私が韓国・朝鮮人に生まれたことは「嫌なこと、恥ずかしいこと」と思っていたけど、考えてみれば「日本人には見えないこと、考えようもないことを私は考えたり、感じたりできるすばらしいことやったのかもしれへん」。耳が悪くてよく聴こえないことも、そのために「相手がよく聴こえているかな」と気づかったり、配慮することができるという意味でもとてもええことやったのかもしれへん。そんなふうに思えてきたんですね。これらは私が昔、自分を否定する恰好の材料でした。でもその恰好の材料は今も変わっていないのに、私はいつのまにか自分のことが「結構ええな。結構好きやな。私ってなかなかイケてるやん」と思えるようになってきたんです。気がつく「自己肯定感情」がとても高められている自分に気がついてきました。

私の中学、高校時代はすごいですよ。心の温度がマイナスで冷えていたから、その頃の自分のしんどさから顧みて「ああ思春期ってなんてしんどいんやろ。思春期を何かしら支えるようなきっかけができたらいいな。私が何年もかかって皆にあつたためてもらって氷を溶かしたように、そんな経験を中学生、高校生ができるようになったらいいな」と考え始めたわけです。

## [ からだの栄養とこころの栄養 ]

私が自分にもらったものをつくづく考えてみたら、こんなものをもらっていたんです。YWCAという場所でこんなものをもらった。「からだの栄養」と「こころの栄養」を合わせてたくさんもらってたんです。からだの栄養をもらうのはこういうことです。皆さん、足りているでしょうか。からだの栄養はちゃんと食べている。ちゃんと寝ている。毎日運動がある。物質的に豊かになった日本ですけど、ちゃんと食べる、寝る、運動するということは大人も子どもも今、ぐちゃぐちゃになっている。食べるというのは何もコンビニ弁当ばかり食べているのではありません。人間的なものを人間的な喜びを持って「うれしいな、楽しいな」という会話をしながら食べること。それが食べるということ。身体の栄養につながる食

べるといことです。ところが今時、子どもたちに聞くと、朝御飯を食べてないし、「前の晩御飯は何を食べた？」と聞いても「ポテトチップス一人で食べとった」「菓子パン一人で食べとった」「食べてない。抜いた」という子どもがあっちもこっちにも山のようにおるんです。もっとさらに小さい子どもたちでも髪の毛を茶髪にして服はブランドもんを着てるのに、朝ご飯食べてない。昼ご飯もまともなもの食べてないということがあっちでこっちで起こっている現状です。

眠るということも人間の健康にとって大事ですね。朝になったら気持ちよく起きる。夜になったら疲れてぐっすり眠る。こういうリズムがちゃんと体内にあるにもかかわらず、我々のバランスはしょっちゅう崩れています。夜になっても寝られない、朝になっても起きられへん、昼夜がどんどん逆転していく、食欲もなくなる、運動もしたくなくなる、無気力になっていく、という悪循環はしょっちゅう起こります。身体の栄養足りてますか、皆さん。大人も危ないですからね。子どもの世界で起こっている危ないことは大人の世界ではもう十分起こってることなんですよ。子どもの世界に凝縮して現れているだけなんです。

ではもう一つ「心の栄養」をもらっていますか。これがね、また大事なんですけど、全国どこで聞いても「こんなん、もらったことない」という人が多いんです。「全然もらってない」という人もいます。「心に栄養をもらう」というのはこういうことです。誰かに大切にされているとか、関心を持ってもらっている。聞いてくれる人がおる。そういうことです。これらは大げさなことではない。小さなやりとりの一つひとつの中に感ずるものです。皆さんが顔色が悪い時「どうしたん、顔色悪いで。熱でもあるのん違う？」と聞いてくれる人がおったら、皆さんが大切にされており、関心を持ってもらっているということです。顔色が悪くてシュンとしているのに、誰も気がついてくれない。みんなバタバタしててふっと気がついた人が「何や、あんたそんなところで、いつまでさぼってるのん」。どっと疲れて嫌になっていきますね。大切にしてもらおう、関心を持ってもらうことは些細なことの中に起こるんです。聴いてもらう。人間が生きていくことは辛いことが一杯起こることです。うれしいこともあるけど、辛いこと、悲しいこと、嫌なことがあった時「この話、誰かに聴いてもらおう」と思える時はまだ幸せです。今時、聴いてくれる人がいなくて「こんな辛いことあった、嫌なことあった

けど、誰も聴いてもらう人おらん」と一人の心の中に閉じ込めていく人が多いんです。身近に聴いてくれる人がいる。説教したり、教えこんだりせずに「フンフン」と優しく聴いてくれる人がおることはとても大事なことです。認めてもらったり、褒めてもらったり、信じてもらったりすることもとても大事なことです。

日本の社会はこういうものをたくさん使わないんですね。謙虚さが美德とか、そういう文化があって、人をわざわざ認めたり、褒めたりする言葉は使いません。でも反対に人をけなしたり、低く言う言葉はよう言うんです。たとえば親たちも家の子どものことを紹介する時、「うちの子ね、全然あきませんねんわ。学校の勉強もあかん、性格も悪い。ごんたくれで何の役にもたたんし」とよう言う。日本の社会の中ではホンネとタテマエである程度、親の中では切り換えているのでしょけど、そんな横で聞いててうれしいはずないんですね。親から見えている自分は「あれもでけへん、これもでけへん、ただのごんたくれか」と自己否定的になっていくという感じですね。褒めてもらったり、信じてもらったり、あるがままに受け入れてもらうことも心の栄養にとって重要なことなんです。「あるがままに受け入れてもらう」というのは、元気でいきいきとシャカシャカ成功してやっている時だけじゃなくて、失敗したり、落ち込んだり、無気力になったり、病気になるったり、とんでもない状態になっても「あなたがいてうれしかったよ。あなたがいてるから大丈夫」と言ってくれる人たちがそばにおるといこと。それがあるがままに「無条件のOKをもらう」ということです。

「無条件のOK」の反対は「条件付OK」です。子どもたちの中にはこういうOKをもらってくる子がおります。「うちの子、成績もいいですし、スポーツもようできる。学校の先生にもよう褒めてもらうんです。自慢の息子なんです。自慢の娘なんです」。この子がもらっているのは条件付のOKなんです。成績がよくて、先生に認められている間はOK。でも「そうじゃなくなったらあかんのかもしれへん」という不安を実は合わせ持つことになる。それが条件付のOKです。小学校の時、無茶苦茶優等生やったのに中学になって一回悪い点とったからというて、すぐに引きこもったり、閉じこもったりすることが起こるんです。「自分は何の価値もないんや。自分は親に認められるような子やないんや」と、たった一回の失敗が極端な自己否定に走らせることが起こるのは、その子がもらってきたのが条件付OK

やったりするからです。条件付OKをもらうために子どもは小さい時からものすごく頑張っ、一杯勉強して、一杯スポーツもしてきて、一回の失敗で燃え尽きてしまうことが起こりやすくなっています。

無条件のOKをもらうことはこういうことです。花子ちゃんの親がこう言います。「うちの花子は性格悪いし、勉強もできへんし、友だちもおれへん。運動もできへん。見かけも悪い。でも私の目から見て可愛くて可愛くて仕方ないんですよ」。これは無条件のOKをもらっているんです。この子は強いですよ。何も失うものはあらへんのです。こんなにどん底でしょう、顔も悪い、性格も悪い、何も悪い、何もええとこないのに可愛くて仕方がない。この子の強さは、どんなにどん底でも「自分は愛されているや」という確信に近いもの、それをこの子はもらっているんです。この子は強い。羨ましいくらい強いですね。私が勝手につけた言葉では「天然の自己肯定感情をはぐくんできてもらった子ども」でもあります。顔はぶちゃいくでも、何かできへんでも「自分のことを好き」と言うてる子、たまにおります。「この子はええ育ち方をしたんやな」とつくづく思います。この子がもらってきたものは無条件のOKだったんですね。

## [心の栄養不足は暴力を引き出す]

今時、こんな減多にもろうてきてないんですよ。誰も彼もが心の栄養不足を抱えています。思春期の子どもたちってその典型です。ストレスが一杯、一杯です。ストレスが長く続いて暴力的になっていくんです。暴力は二つの方向で現れます。人に向かって暴力的な振る舞いをする。中学生、高校生の男の子たちは肉体的な暴力を出していく。男の子には暴力が許されているからです。「男の子は多少暴力的なのはしゃあない」と習ってくる。また男らしさの文化が「男は暴力的であってもいいんや。体育会系のスパルタで行け。それが男や」という環境の中で頑張らされてくるので、男の子たちはしばしば心の栄養不足からくる暴力を人に向ける。殴ったり、蹴ったり、人を攻撃するような大声で怒鳴ったり、命令口調で上から下に支配するような言い方をしたり、そういうやり方を発揮していく。

もう一つ心の栄養不足は自分に暴力を向ける形で起こります。思春期の子ども

たちはたくさんします。自分に暴力を向ける。肉体的にはたくさん自傷行為をします。リストカットはよく子どもたちがやります。手首を切る、タバコの火を押しつける。ありとあらゆるもので自分の身体を傷つける。薬物依存、女の子に起こりやすいのは拒食症、過食症によって自分の身体を傷つけていくやり方です。加えてたくさん自己否定的な言葉を使う。そういう言動もやります。自己否定的な言葉、大人も使いますが、子どもたちは「どうせ自分なんか」「どうせ俺なんか何やったってできへん」「何も変わらへん。何やったって一緒や」「どうせ才能ないもん。何やってもうまいこといけへん」「どうせ期待もされてないもん」「こんなところに生まれてこん方がよかったぐらいやもん」「どうせ死んだ方がよかったんや」。こんな言葉をしょっちゅう語ります。自己否定的な言葉です。子どもたちが語っている時には、日本の文化にある謙遜<sup>けんそん</sup>は美徳というレベルは通り越しています。心底そう思いながら、自分自身に暴力を投げつける。でもすごいわかるんです。私の10代がそうでしたから。辛うじて恐くて自傷行為はできへんかったのは救いです。私は痛いのに弱いんです。肉体的な自傷行為をせえへんかったのは救いでした。自己否定的な言葉はいくらでも考えつくことができた。

こういう暴力の連鎖、暴力が弱い方に向かっていくということが学校でも起こっています。栄養不足の家庭の中で、父親から母親から大事にされていない、認められていない、無条件のOKをもらってない中で、頑張りすぎて燃え尽きてきた子どもたち。今や子どもたちは早いうちから燃え尽きています。頑張れば頑張るほど燃え尽きるんですね。親が求めるようなええ子、先生が求めるようなええ子に伝えたいと思って頑張ってしまうから燃え尽きてしまいます。それを人に向けたり、自分に向けたり、さまざまな暴力的なかかわりの中で自己否定感情を大きくしていく。自己肯定感情は地を這う如くに下がっていきます。中学生に「自分のこと好きですか？」と聞かせませんよ。研修会の会場、プイと立ち去っていく子どもが何人もあります。「そんなもん、聞かれたないわ」という感じですよ。皆さん、迂闊<sup>うかつ</sup>に聞いたらあきませんよ。それくらい冷えて、固まって、ピリピリしている状況にあります。

## [ 栄養不足の根源にあるもの ]

なんでこんなに誰もかれもが栄養不足になったんやということを私はつくづく考えるようになったんです。考えて行き着いた結果、二つの原因に至りました。一つは今の私たちを取り巻いている「経済至上主義」の考え方です。経済至上主義の考え方が本格的に始まったのは20世紀です。20世紀という時代、この100年に私たちはものすごいことになってしまっていました。20世紀という世紀、この100年を私なりに説明すると「モノをつくってモノで豊かになろうとした時代」でした。それが明確な形で始まったのは19世紀終わりの産業革命です。産業革命という言葉は知っていましたが、今、生きている自分にこんなに影響を与えているなんて考えたこともなかったです。社会科の教科書の中で受験に出てくるだけやと思っていた。でも産業革命はものすごい大きな変革をもたらしました。それまで共同体の中で人の暮らしが行われていたものを合理的に効率を求めて職住が分けられていきました。職場は大規模、ベルトコンベア式の大規模工場。ここで大事にされた価値観が経済至上主義です。どんな価値観か。工場の中で大事にされる価値観。「速くできることがよい」「きちんとできることがよい」「たくさんできることがよい」。大量生産ですから。「画一的に皆同じものができることがよい」。画一製品をつくらないといけないですから。「効率のよいことがよい」。さらに加えて「失敗はしてはいけない」。B級品になる。これが経済至上主義、大量生産の工場の中で大事にされた価値観です。「速くできて、きちんとできて、たくさんできて、同じものが同じように効率よく失敗しないで出来上がっていく」。そうやって我々の20世紀はモノで豊かになっていきました。この価値観は工場の中ではそこそこ成功した価値観だったと思います。でも20世紀、この価値観はゆっくり始まっていたはずですが、戦後、ここ30、40年、この価値観はすべてのものを支配していく価値観になった。すべてのもの。それは人間を見る価値観にまでなっていきました。

## [ 子どもをとりまく経済至上主義 ]

きょうび、子どもたちはこの言葉を朝から晩まで聞くようになりました。「早くしなさい」「きちんとしなさい」「たくさん食べて、たくさん友だちつくって、たくさん勉強して、たくさん塾へ行って、たくさん何でもたくさんやりなさい」。『皆と同じようにしんかいな。周りよう見て出すぎてもあかんやろ。遅れてもあかんやろ。皆と同じようにちゃんとついていきなさいよ』。「何でも効率よくしなさい、ちゃっちゃと」。「道草とか寄り道とかしててどうするのん」。「先生の後ろにピタッとくっついてちゃっちゃやりなさい」。「あんたには1か月こんなにお金かけてんねんから、これくらいのところに行ってくれな困るわ」。「失敗なんかしてたら許さへんで」。子どもは、ほんまに聞いているんです。今日朝一番に大阪の南の市で、PTAのお父さん、お母さんが集まる研修会でこの話をしました。この説明をしている時に半分くらいのお父さん、お母さんたちが顔をおさえて、机に「恥ずかしながら」という感じで沈みこみはるんですね。「今朝から、これ言いどおしでした」。子どもにかかわっている大人、親とか教師は1日平均70回くらいは「速く、速く」を言うんだそうです。「速くしなさいよ」ではない。「はよ、はよう、はよう」と連呼する。子どもたちの世界で起こっている状況そのものです。それを言われる年齢はどんどん低年齢化しているんです。2歳や3歳で十分聞いているんです。なんでわかるか。2歳、3歳の子どもが「速くしよう」「きちんとしよう」「たくさんがいい」「失敗したらあかん」と言うからです。

今の社会で子ども時代を生きるということはこの価値観に縛られて無茶苦茶しんどいことになっています。この価値観に縛られたら人間誰でも自己否定的になるんですよ。こんな人間を見る価値観にしたらあかんかったんです。対人援助者の研究にとっては重要なことです。工場の中の価値観にしておかないとあかんかった。こんなんでできるのはロボットだけです。人間は1日24時間、一生こんなのやっていけません。できるのはロボットだけ。「そうです、20世紀は人間よりもロボットの方がいい」と考えはじめているんです。工場の中で人間はどんどんクビを切られて、1日24時間きちんと働くロボットや機械を採用していくことが、とっくにあっちでこっちで起こっているのです。我々はこの20世紀に人間が幸

せになろうとしました。人間がモノをつくって豊かになって幸せになろうとしてきた100年だったのに、気がついたら人間という存在のすべてを否定しながら、生きにくさ、生きづらさの中で自分で自分の首を締めていく状況に追い詰めていたのです。子どもたちは小さい時からこれに一目散に頑張らされている。頑張れている間だけが自己承認、自分を承認できるぎりぎりの段階です。常にこれができていないといけない。ちょっとでもできへんようなことを自覚すると「ああ、なんて、自分はあかんのや。価値がない」と思い始めることがあらゆるところで起こるんです。経済至上主義は社会の隅々に至るまで大きな影響を及ぼしていきました。

たとえば子どもは消費者にさせられてきたんです。消費者にさせられるということはどういうことか。子どもは昔は生産者だった。子どもなりにいろんなものを生み出す、つくりだす、創造力を持った、活力を持った存在やったんです。オモチャも何もないから、子どもたちは工夫してオモチャをつくり、釣り竿をつくり、お人形をつくりお手玉をつくって、いろんなことに生産する喜びや力を発揮して自己肯定感情をはぐくむチャンスもあったんです。ところが今や子どもたちは消費者にさせられました。経済至上主義にとって子どもは<sup>かっこう</sup>恰好の消費者です。6つのポケットを持っていると言われます。お父さんとお母さん、その両方のおじいちゃん、おばあちゃんからもらうポケットを持った子どもたちは恰好の消費者です。それに向けて経済至上主義はものすごい勢いで襲いかかっています。子どもの物欲を絶えず刺激するというやり方で。「こんな新しいゲーム出たよ」「こんな新しい携帯出たよ」「買わな乗り遅れるよ」「持ってなかったら仲間外れになるよ」「はよ、買いや。これ買いや」とコマーシャルズの波の中で、子どもたちは絶えず物欲を刺激され続ける環境に置かれています。

昔の子ども、今、大人になってしまった人はこう言います。「今時の子どもはモノばかり欲しがって」。その人たちの子ども時代はよかったんです。何もモノがないから。モノがない環境の中でモノを我慢するのは簡単なことです。誰も持っていないから。たまに持っていたって一人か二人の金持ちの子どもです。持っていない子どもが多数派でした。今の時代は違います。皆、持っているのが多数派です。しかも町を歩けば、そこら中にモノが溢れかえっていて、手を伸ばせば届くところ

るにある。そういう中で、子どもたちは消費と物欲だけを刺激され続ける中に追いやられる。消費することは自己肯定感情をはぐくむことに何ら貢献してくれない。消費の楽しみはすぐ尽きるんです。もっと高いもの、もっと価値あるものを消費していくしかないんですね。生産する喜びは違うんです。長続きするんです。「こんなものがつくれる私」「こんなものがつくれる僕」というのは、とても長続きする自己肯定感情をはぐくむ経験だったのに、今や子どもたちは消費者にさせられています。

また、この経済至上主義はすべてにおいて競争を持ち込む社会です。いつでも「人と比べて速く、きちんと同じようにせなあかん」。そういう環境に追いやります。中学生たちがこんなふうに聞かせてくれます。「ほんまの友だちなんておれへんで」。「<sup>しよせん</sup>所詮はな、仲間外れにされたり苛められたりするの嫌やから、表面的には仲良さそうにしとくねん。所詮、あいつが勝つか、俺が勝つかやねん」。こんなシビアなシニカルなことを中学1年生や2年生が語ってくれます。あらゆるものを小さい時から競争させられてきた彼らが身につけている価値観です。「所詮、人は皆競争相手、ライバルなんや。ほんまの友だちなんて、ゲームの世界にも出てけえへんわ。そんなもん、あったらウソや」。そんな実感が彼らの心をとて支配している。すべてに競争なんです。勝ち続けている間だけが自己肯定を何とかできる。薄い氷の上ですけど。誰しも競争から続々落ちていく、振り落とされていく中にあります。

## [ 体験を失なう ]

さらに経済至上主義はどんどん体験を失っていかせました。人間にとって人間らしい体験は必要やったんです。子ども時代にお手伝いするのはいい経験やった。皆さん、お手伝いしていました？今時、子どもはお手伝いしませんよ。親はこう言います。「手伝いなんかせんでええ。お前、勉強しておきなさい。速く、きちんとたくさん勉強してええとこ行かなあかんのやから」。子どもたちはお手伝いするとか、人にかかわるとい世界から遠ざけられていく。体験なんかせんでいい。昔はお風呂を沸かすというお手伝いを毎日、薪を割るところからやっていた子が

おったりする。薪割ったり、うまく沸かすには工夫がいる。新聞紙丸めてマッチ1本で点火して、風を送って上手に沸かしたお風呂で、適温で家族の皆が気持ちよくお風呂に入る体験の一つひとつも自己肯定感情をはぐくんでいったんです。今時、必要はなくなりました。お風呂沸かすというと、ボタン二つも押したらいいんです。一つ押したら水が溜まる。もう一つ押したら適温に沸く。人間的な体験があちでもこちでもなくなって、子どもたちはただ「早う勉強しなさい」。そういう世界に追いやられていったんです。

## [ 対話を失なう ]

加えて子どもたちの世界でも大人の世界でも対話がどんどんなくなっていきました。ものが豊かにできて便利なものが発明されたら、対話の時間が増えるはずだった。人間がやらないといかん仕事を機械が代わりにやってくれて、もっと対話が増えるはずでした。でも現実には全く反対だったんです。テレビがいい例ですね。テレビが初めてできた頃は、お金持ちの家であって、皆でワーッと見に行くと盛り上がったんだそうです。アッという間にテレビは一家に1台の時代になって、一家の人数が多いですから、居間に集まって皆で紅白歌合戦を見ながら「この1年こうやったな」という対話があったんです。でもあつという間にテレビは一人に1台の時代になって、自分の部屋で自分の好きな番組を見ている。人と人との間に便利なものが溢れすぎて人と人との対話はどんどんなくなっていったんです。人と人は直接に豊かにコミュニケーションをしあうような関係をどんどんなくして、ゲームとビデオとテレビと対話する時間の方がうんとたくさんになった。

沖縄と長野県でこんな話を聞きました。沖縄には「ゆんたくする」という言葉があって、ゆったりお茶のみ話をするという意味です。沖縄の大事な文化だったそうです。沖縄のおじいやおばあが自分たちの持ってきたお茶やお菓子を出しながらゆんたくする。ところが今時、おじいもおばあもゆんたくなつてせえへんようになった。忙しく走り回っているから。どんどん気持ちは寂しくなった。沖縄のおばあから聞かせてもらいました。長野県でも同じようなことを聞きました。

農作業の合間に家で漬けた漬物を持ち寄ってお茶する「小昼」という時間があったんだそうです。「うちのがおいしいやろ」と自慢しあいながら対話の時間は楽しい時だった。今時、長野でも「小昼」やってません。皆、自動車で忙しく走り回っています。田んぼのわきでやってたら危ないだけです。そう言われるようになってしまった。我々の20世紀、あっという間にものすごいスピードですべてのことを飲み込んでいった時代でした。

## [ 性別役割分業の強化 ]

これが大きな一つの原因ですが、もう一つ、経済至上主義は個別な役割を効率を求めてつくりだします。男らしさ、女らしさを強化することが起こります。経済至上主義が性別役割分業を強化していったと私は思っています。人間が一緒のところをやっていた営みを効率を求めて分けたんです。職住を分けた。工場で働くのは男たち、家の仕事をするのは女たち、と効率を求めて分けました。なぜなら女性たちは妊娠や出産や育児という責任を負わされることが多いからです。男という労働者と比べると「速く」「きちんと」「たくさん」できへん。子どもが病気がしたというとならないとあかん。そういう労働者は劣ったものとして切り捨てられていきました。性別役割分業には二つの落とし穴がありました。一つは個人の特性、個性、能力を全く無視することです。男は職場・女は家庭と分けられていき、個人の特性も無視されました。もう一つの罠は、職場で働く者だけ給料がついたことです。家でする仕事には給料はつきませんでした。もともとは両方が一緒にやっていた人間の営み、大事な働きを、効率を求めて分けたんです。経済至上主義社会はお金を持っている者が偉い。職場で働き給料を手にする男性たちが社会的強者になっていきました。家にいて給料という現金収入を持たない女性たちは社会的弱者にされていくことが起こっていきました。

経済至上主義の中で今時、専業主婦で子育てしているお母さんたちは一番しんどいです。なぜなら、30代前後で専業主婦をしながら子育てしているお母さんは、ちょっと前までは経済至上主義の中での勝ち組やった。勝ち組の中で「速く」「きちんと」とやって、自分も給料をもらう方に入っていた。ところが結婚・妊娠・出

産によってこっち側に来てしまった。そこではものすごいたくさんのもを失う。経済的な裏付けも、社会的な地位も名誉も何もかも。毎日向きあわされるのは、言うことを聞いてくれへん、わけのわからん、言葉も通じない赤ん坊、子ども、そこに向き合わされて、自分と同じように学校に行き、働いていた夫は認められたり、お給料をもらっているのに自分はそういう評価をもらえず追い詰められていくことが起こる。専業主婦の人たちの中には「ここで勝つために自分を証明するものはこの子どもをエリートに育てること、それが自分の存在証明だ」と感じはじめる人がおっても当然のことです。

人間は自分の名前でもらうと自分のものやと思うんです。給料だってそうです。給料持って帰って「これは君と僕の二人で稼いだんやな。二人で半分っこやな」。こんなん言うてくれるの、新婚の時だけです。すぐに「お前ら誰に飯食わしてもらうてると思うてんのじゃ。俺がこんなにしんどい思いして働いているのに、お前なんか家におって、のうのうと子どもと昼寝しているだけやないか」という言われ方をするようになっていきます。

## 【子どもたちのしんどい状況】

こういう仕組みの中で、大人も子どもも、男も女も皆がアップアップにしんどい状態を抱えることが起こっているのが今、我々が生きている現状です。しかも時代はこれに加速度が止まらないくらい勢いがついている。「速く」「きちんと」「ちゃんと」「しっかり」。これで生きたら生きにくいということは誰もがわかっているんです。でも中学生、高校生の子どもの持っているお母さんたちもテキメンに言われます。「金さん、この話はようわかりました。でもこれで追い立てなければ、ええところに行かせなければ、うちの子も、生きていかれへんのとちゃうでしょうか」と言われるんです。これでは生きていけないと知っているんですよ。子どもたちは小さいうちから言われすぎて、10歳や15歳でバーンアウトしているんです。燃え尽きている、頑張りすぎて。そこを生き抜いていったって超不況で、超リストラの社会の中では、どれだけ有名な学校を出ようが、有名な会社にいこうが、終身雇用ができるような安泰なところはない。それも一方ではわかっている

んですよ。ニュースも毎日見ていたらわかることです。でも「うちの子どもは、中間試験、実力試験、模擬試験、ちゃんとええ点とらせて、頑張らせなあかん」と言う。そこから抜けきれないということが起きている。どないしたらええのかなと私も思います。こういうところに生きています。

## [中学生の自分を好きになるワークショップ]

それで私がやっていることを紹介したいと思います。中学生、高校生のために「自分を好きになるワークショップ」を実践しています。社会人の時、大学院に行き直したんです。仕事をさぼる口実をつくりたかった。ただではさぼらせてくれないので「大学院に行く」と言うて。96、97年でした。東京のとある中学校で2泊3日の学校行事としての宿泊合宿「自分と出会うワークショップ」に行かせてもらったんです。中学2年生が対象です。その学校はミッションスクールです。このミッションスクールは私の目から見ると人間を大事にすることをかなり貫いている学校やったんです。100年くらい伝統のある中高一貫の学校です。「修養会」をする。馴染みないですか。私なりに考えてみると「自分に向き合う、神に向き合う一時」なのかなと思います。このミッションスクールは昔から中学2年生と3年生に修養会を2泊3日でやっていた。これだけでもすごいことです。受験にも関係がない。付け加えると、この学校は偏差値の高い学校です。1学年約240人、東京でいうと私立女子中高御三家に入ると言われている学校です。240人のうちに100人が東大に行ったりする。私はそれを知らなかったんですが、依頼を受けてから「そんな偏差値の高い学校だったら自己肯定感情は高いだろう。私が行く必要がないだろう」と思えた。実際にはそうじゃなかった。「賢い子ほど自己否定的になる」ということがわかったんです。私にとってええ勉強でした。賢いから自分を見つめるから、自分に向き合うから自己否定的にならざるをえない。しかもこの学校なら小学校で1番でも入れない。入ってみたら周りは無茶苦茶賢い子ばかり山のようにおる。そういう中で、かろうじて持っていた自己肯定感情なんかペキペキ鼻を折られる経験をさせられることが起こる。子どもたちの自己肯定感情は結構低かったんです。

2泊3日、自分と出会うワークショップをやりました。1学年240人。2年間やる。学校が持っている山の家は120人が定員です。120人を前半と後半に分けてワークショップをするスケジュールでした。私は通して参加するので5泊6日になって、えらいしんどい作業でした。セルフ・エスティーム、自己肯定感情の心理尺度があります。いろんなものが開発されていると思いますが、子どもたちが一番答えやすい自尊感情の心理尺度を用いてワークショップの直前と1日目が終わってから、2日目が終わってから、3日目が終わってからとることをしたんです。もう一つ、私は実はあまり自分自身は数字に強くない。数字で人間を表すのも好きじゃないんですよ。なのになぜしたか。数字でしか信じない人間が多いんですね。それで「それやったら見せたらうやないか」と、生涯1回だけ数字でとってみることをやってみた。それだけでは面白くないので、毎回、中学生が自由記述で書き残して出してくれる「振り返り用紙」をもう一つの分析方法としてとったんです。

心理尺度を使ってみた自己肯定感情がどう変化したか。一昔前の高度経済成長みたいに右肩上がりにどんどん上がっているのが結論です。「あまりに見事に上がりすぎている」と言われたんですが。そらそうやろと思ったんです。私がこんなにエネルギーかけてやってんもん。ワークショップに使うエネルギーはものすごい大きいんです。体調を整えるためにいろいろします。5泊6日は不眠不休なんです。子どもたちが書いてくれる振り返り用紙に返事を書く。120人もいっぺんにしますから、一人ひとりになかなか声をかけられない。全員が出してくれる振り返り用紙を見て、夜な夜な返事書く作業を毎晩するんです。それはものすごいエネルギーと時間を使う。5泊6日の体力をキープするだけでも大変なものでした。でも、その甲斐あって、子どもたちの自尊感情は上がっていった。

より重要でもっと面白いのは、子どもたちが書いてくれるものです。あれは私の宝物でもあります。全く自由記述にしています。「今日、考えたこと、思ったこと、発見したことを自由に書いてみましょう」。実にいろんな書き方がある。それを分析していきます。最後に「川柳<sup>せんにゅう</sup>で今の気持ちを書いてみよう」と。川柳を語れば語るほど私の歴史があるんです。神戸で震災の後に、避難所を回っていた時、川柳を教えてもらったおじいちゃんがおったんです。避難所から仮設住宅に移っ

た。そのおじいちゃんが自治会長になって私と話をしながら教えてくれた。「自分は川柳をやっている。川柳と俳句の違い。俳句は季語がある。川柳は季語がない。俳句は花鳥風月を詠む。川柳は人間を詠むんやで」。いたく感激した私は、それ以来、振り返り用紙に「川柳で一句書いてみよう」と入れるようになったんです。

## [ 中学生たちの川柳 ]

ワークショップが終わった後、中学生の皆がつくってくれた川柳です。五七五、17文字に同じ川柳が出てきたことがないんです。人間ってすごい多様性があるって個性的だなと思います。その川柳は6つに分けられると思った。1群「自分の存在そのものを肯定する気持ち」。ワークショップが終わった瞬間にこんなふうに詠んでいる。「私にも たくさんいいとこ あるんだよ」。中学2年生の本心やろうと思います。「だいじょーぶ 私はちゃんと 愛せる人」。自分を愛せることの大事さを3日間を通して言っていますから。「そうだった アイムオーケー 御殿場にて」。御殿場は山の家のある場所です。アイムOK、ユーアーOKはここでのキーワードでもありました。「今のまま 私のままで オーケーだ」。無条件のOKだということも渡したかった。「いつだって 私は私 それでいい」「アイムオーケー ええねんこれでも 自分なら」。東京の子どもたちです。すっかり3日間で、私の関西弁がうつってるんですね。ええねんと。「いいとこも わるいところも わたしです」「嫌なところ たくさんあるけど それも私」。嫌な自分を蓋していない。嫌な自分もちゃんと見えて「それでええ」という気持ちが自己肯定感情です。「やっぱりね 今の私が 一番いい」。こんなことを確認してもらったらうれしいなと思います。「私はね 私だからこそ 好きなんだ」「好きな人 みんなもやっぱり自分だね」。それぞれ自分のことを好きだと思っている。「私でも きっと少しは役に立つ」。今まで役に立たない人間やと思っていたのかもしれませんが。でもそんなことを言ってくれる。「アイムオーケー 私はこれで いいんだな」。いいんだなと自分に改めて言い聞かせている姿が見えますね。「悩むのも 仕方ないよね これも青春」。悩んだり苦しんだりすること自体を肯定できる彼女たちになっている。「福ちゃんは いいとこいっぱい あるんだぞ」。自分のことですね。「ぶんぶ

んは なにがあっても ぶんぶんだ」「スーザンは 他にはいない 私だけ」「みわっちは ふよふよするのが あたりまえ」。そういう自分のことを大事に見つめ、表現している子どもたちがいます。自分の存在を肯定する気持ちをこんなふうに表してくれています。

一方また「自分と出会う、自分を発見する」ことそのものを句にしてくれている子どもたちもいます。「新しい 自分見つけた 大発見!」。自分を見つけることが大発見と表しています。「色めがね 外して見えた ホントの自分」。今までの自分を見る見方は経済至上主義の中で色メガネで「だめな自分、あかん自分」と見てたでしょうけど、それを外してみたら、ええとこ一杯見えてきたんでしょうね。「本当の自分が少し 出せてきた」「少しだけ 自信がもてた 3日間」。少しだけと言っているところが可愛いですね。「いいところ 聞けば結構 あったんだ」「13歳で 初めてわかった 自分のこころ」。これ見ながら「まだ13歳やねんで」と思いましたね。13歳でこんなことわかったらすごいなと思いました。羨ましくも思いました。私はもっとうんと後になって気がつきましたから。「不思議だな 自分を好きに なっている」「霧のような 自分を少し つかんで?」「御殿場は 五七五じゃ 言い足りない」「心の中 じっと見つけた 三日間」「三日でも たくさん悩んで 少し大人」。大人になったんでしょうね。「御殿場で 一皮むけた 三日間」。そんなふうに自分との出会いや発見を表現しています。

そしてまた「自分らしさ、自分の個性」をいろいろに面白い言葉で表現しています。「おわらいを 好きな私は かっこええ」。こんなことを他のところでは評価してもらえないと思います。「わたくしは わたしのために ちびなのだ」。思春期10代の頃は身体の悩みは大きいです。背が小さいことをコンプレックスに思って気に掛けていた。その彼女が「わたくしは わたしのために ちびなのだ」。こんなふうに言い切れるって、とてもすごいことです。「今みれば この字も面(つら)も私だけ」。個性的な字で書いてくれているんですね。「この世界 私らしいの 私だけ」。この世で唯一無二の存在として自分らしいということを表現してくれています。「外見は クールで中身は ホットだけ」。これもその子なんですね。「どんぐりのようだと言われ そうなんだ」。自己肯定的ですね。「自分らしさ 探し方から そうだよな」。自分を探す探し方から自分らしい。「わたしには 気に

ならない このくさい足」。すごいですよ。何でも肯定しきりますからね。「これ以上 日焼けはしない 黒い肌」「落書きと 三食昼寝が 大好きだ」「アクセサリー とった私を みんな見て」「やなところ 考え直せば いいところ」。こんなふうに自分らしさを肯定的に表現できる子どもたちがおります。

「友との出あい、つながり」。経済至上主義社会では友だち関係をライバルにしています。表面的な友だちのふりはするけれども、彼女たちは友だちに出会うことをする。つながったりする。それまでは同じクラスにいても友だちの名前も全部覚えていない。きょうびの子どもは同じクラスでも「え、あの子、同じクラス?」と言いますよ。同じクラスで友だちと出会うことが起こる。

「友だちの いいところ探し おもしろい」。ワークショップの中で友だちのいいところを探す。自分のいいところを探してもらう。人のためにやっていて面白い。「なぜだろう それぞれ違う 皆の考え」「自分でも さがしてみよう いいところ」「失敗を しても友達 優しいな」。こんなと言える子、幸せです。クラスの中にこんな友だちを一人でも持てたら学校に行くのが楽しくなります。「いろんな人に 知らせて知られた 窓の向こう」。ジョハリの窓を聞かれたことがありますか。自分が見せている窓や見せていない窓があるけれども、ワークショップでは自分をどんどん見せていこう、そういう自分を見てもらおうと、友だちに今まで隠していた自分を見せたのでしょう。見てもらったんでしょう。窓の向こうに友だちを感じます。「うれしくて ころろたくさん うれしくて」。グループを通してワークショップをするんですが、友だちからあたたかいメッセージをもらう経験を通して「ころろたくさんうれしくて」と言っています。「うれしいな みんなに会えて 本当に」「友達がいるから そこにわたしがいる」「うれしいな みんなに長所を おそわった」。自分の長所を皆に教わった。「友達が 知ってくれてる 良いところ」。自分のよいところを知ってくれている友達がいる場、空間は幸せな空間です。「みなつどい 楽しい御殿場 ありがとう」。感謝したくてたまらない気持ちの表れでもあります。

「ファシリテーターへの気持ち」。ワークショップを進めているファシリテーターとしての私への気持ちをこんなふうに書いてくれています。「キムリンの あったかムードに つつまれて」。私は美人やないけどと話をしたんです。ちゃんと応

えてくれて「キムリンは 美人じゃなくても 健康美人」。こんなん言うてくれる可愛い子なんですね。「御殿場で 自分を見つけた キムリンと」。これはうれしい言葉です。対人援助者としての私にとって。四国に行くと、四国八十八ヶ所のお遍路さんの旅があるでしょ。あの「同行二人」です。「一人で回っているのではないよ。あなたには弘法大師がいつもより添って一緒に回っている」。私は自分を見つめるなんて作業をとても一人でさせたくないです。「自分を知るといふしんどくて辛い作業をするあなたをとてもあたたかく見つめてくれている仲間がいるよ。神様がいる。仏様が一緒にいてくれる」と思ってくれたらいいなと思います。ここで「自分を見つけたキムリンと」と言ってくれたのは最高にうれしい言葉でもあります。「キムリンは みんなのアイドル 人気者!」「ありちゃんも みんなのアイドル 人気者!」と自分のことをはっきり言っています。「キムリンの あたたかい笑顔で おもわず笑顔」「三日間 キムリンどうも ありがとう」。その場にいるファシリテーターとのつながり、友人たちとのつながり、自分自身とのつながりを彼女たちが表現していて、それは突き抜けた感じがあって、時には人間讃歌のような川柳にもたくさん出くわすんです。

突き抜けて「人間讃歌」。こんな感じです。「にんげんは せかいのみんながいい人だ」。こんなに言い切ってしまう気持ちになるんでしょうね。自分のことが好き、あなたが好きという気持ちの中で「いつだって 私もあなたも アイムオーケー」「オーケーです! 私もあなたも ちょうオーケー」「誰にでも 長所は絶対 あるんだね」「人はみな みんなで支えて 生きている」「人間は みんなちがうから おもしろい」「いつだって アイムオーケー ユーアーオーケー」「大丈夫 あんたはオッケイ オイラもオッケイ」。こんなふうに突き抜けて「私が好き、あなたが好き」という気持ち。これは自己肯定感情です。自己肯定感情は私のことが好きだけではない。私のことがオーケーと思える。加えてあなたのことがオーケーと思える。この「私オーケー、あなたオーケー」がワンセットになっているものが健全な自己肯定感情なんです。

ところが経済至上主義は時に「あれできへん、これもできへん」、私をどんどん否定的にし、「私もノー、あなたもノー」という関係をつくっていきます。もっと嵩じていけば「人との関係なんか断ち切って」と、うんと子どもの時から言われ

るんです。「自分のことだけさっさとしなさい。人のことなんか、かもうてたらあかん。自分のことだけチャンチャンとやりなさい」。そう言われて素直にやっていった子どもたちは「私だけオーケー」になっている。人間の生き方としてはゆゆしき問題です。「あなた」という存在がないんです。あなたがない。これは大問題です。人間という存在は私の考えでは、人として生まれる。人として生まれた存在は人と人の間で、心の栄養をもらい、身体の栄養をもらい、互いに助けたり、助け合ったりする人間的なかわりの中で人間になっていく。生まれたのは人です。生物の人です。人と人との間で人間的なかわりをもらい、体験を積み重ねて人間になる。ところが「私しかいない」というのでは人の状態から人間になっていない。そういう状態の中では、人に対して暴力を振るう。怪我をさせる。殺すことだって平気に起こっていきかねない。自分もまた人間になっていないのですもの。悪いことをしたと思われぬ。人と人との間で人間的な体験、共同作業、かわり、支えたり、支え合ったりそういうつながりの中で生きてくることなしには、人間にはならへんのですから。でも今我々が生きている経済至上主義の社会は、人として生まれた存在を人間として慈しみ、育てていく装置をボロボロと取り崩していつている。

家庭が崩壊し、地域が崩壊し、ありとあらゆるものが崩壊して「私だけオーケー、私だけがうまくやっていたらいい、他のものは関係ない、見たくもない、かわりたくもない、対話なんかしたくない」という子どもたち、大人たちが確実に増えていつているんです。この時代をどうやって作り直すか。紡ぎ直す。大変なことです。私にも明確な答えがあるわけではありません。一つ言えるのは、もういっぺん人間的な体験と関係をつなぎ直していくこと、紡ぎ直していくこと。心の栄養を循環させあうような関係を一からつくるのはしんどいし、邪魔臭いし、時間もエネルギーもかかるし、すぐには効果も出ないけど、それをやり始めていくしかないと思っております。

## [人間形成相互作用らせん理論]

中学生が書いてくれたものを分析していて、私はすごい面白いものを発見しました。「ああ、この子どもたちに起こっているのはワークショップを通して、自分の体験を体験し、振り返り、さらによい新しい体験にチャレンジしていく循環が生まれているのだな」と思ったんです。ワークショップの1日を経るごとにそういうことが起こっている。彼女たちがワークショップの前に抱えていた状況は「混沌」というものでした。「自分がわからない。社会なんかわからない。何をどう考えたらいいのかわからない。ぐちゃぐちゃや」。混沌の中にあっただんです。思春期はとりわけ混沌のエネルギーに捕まえられやすい。でも混沌から抜け出していくことが起こっている、彼女たちの中に。この抜け出していききっかけは何か。思春期の子どもにかかわっている人たちにとっては一番知りたいことです。私は彼女たちのさまざまに書き起こしてくれたものから3つのものが成立しているのだとわかったんです。

一つは「自分に出会う」。自分を大切に見つけることが始まっている。「他者に出会う」。友だちたちです。自分と他者を見つめる、あたたかい思いと眼差しの中で見つめることが成立している。もう一つは、ミッションスクールの言う「神に出会っている」。一般の言葉で丁寧な言葉で説明しないといけないのですが「神に出会う」ということは上手に言えません。人間を超越して人間を慈しみ、大事なものと思ってくれている「大いなるもの」に大事にしてもらっていることを発見することでもあります。親がだめでも教師がだめでも、突き抜けて自分のことをとても大事とってくれている大きなエネルギー、宇宙のエネルギーでもいいんです。神でも仏でも宇宙のエネルギーでも何でもかまいません。そういう人間を超越するものの大きなあたたかいものにつつまれて、自分は今ここにいるんだという事柄。これはミッションスクールでは成立しやすいつくづく思いました。彼女たちは学校で毎朝礼拝があるんです。皆、嫌いなんですって。毎日わけがわからなくても「神様がおるんやで。そういう神様があなたを見てるよ」というメッセージを聞いている。思春期は「そんなもん、おるか。おったらもっと世の中マシになってるわい」と思っているんですよ。それでも人生のどこかの拍子

に「神とか仏とか大きな愛があるんやな」と思えたら幸せなことです。そういう時は人間にどれだけ絶望しても、まだ救いがある。人間は限界があります。我々は人を裏切りたくないと思っていても裏切ってしまう、傷つけてしまう存在です。傷つくことは大なり小なり経験している。そういう時、人間を突き抜けた存在があって「それでもええねんで」と言うてくれるものに出会えたら幸せです。

これが全部完全な形で成立してなくてもいいんです。おぼろげながらにつながり始めた時、この子どもたちが書くものが変わってくるんですよ。ワークショップが始まった1回目、どんなものを書いているか。「こんな汚いところ」「クーラーもないのにうざったい」「虫が出て嫌や」「夜、寝られへん」と書いている。おおよそワークショップと関係ないところで混沌としている。日1日重ねるほどに自分を見つめる、友だちを感じる言葉に変わっていく。

これを「人間形成相互作用らせん理論」と勿体つけて呼んでいます。このことでいろんなことが説明できるんです。学級崩壊をこれで説明すると学校の先生は「ようわかる」と。学級崩壊は一つのクラスの中で混沌を抱えた子どもたちがようけおる状態です。子どもたちの中にもらせんを描こうとする子、心の栄養を一杯もらっている子どももたまにはおるんです。ところが混沌のエネルギー、マイナスのエネルギーの方が大きすぎる。上に向かって伸びていこうとするエネルギーも急速に混沌のエネルギーに吸い込まれていく。ワークショップでファシリテーターとして私がするのは、混沌を抱えた子どもたちと一緒に悩み、しみながら、私はそれに巻き込まれないで、らせんを描き続けながら一緒にガップリ四つに組む。これをやっていくうちに混沌のエネルギーから出やすい子どもたちが出てくる。らせんが出始めた子どもたちに、その子どもたちのエネルギーに引き出されて他の子どもたちもらせんを描きだす。そういうことがワークショップの2日目、3日目になると起こっていく。この時、私が発揮しているエネルギーは大きいものです。このへんで体温を計ったら熱を放熱しているのではないかと思うくらいです。

ところが現場の学級崩壊のクラスの中では先生たち自身が混沌のエネルギーに吸い込まれていく。らせんを描こうとしても混沌の方が大きいから。「こんな教師」と言うてる子どもに向き合うのは誰にとってもしんどいことです。そんな子ども

があっちもこっちもにいるクラスに行くと考えただけで疲れます。私は中学校の先生は動物園の手負いの獣が入っている檻の中に一緒にほうり込まれた状態と表現しています。中学生は満身創痍まんしんそういの中で混沌のエネルギーの中で、入ってきた誰をも傷つけまくってしまう。担任の教師は吸い込まれて学級崩壊が起こってもむりはない。一人ひとりが抱えている混沌はとても大きいからです。

「人間形成相互作用らせん理論」を打ち立てながらいろいろ考えているところです。「ホリスティックな教育実践」。ホリスティックという言葉については何も大したことを説明していません。「つながり、かかわりあい、人間的な体験をきわめて大事にしていく。結果や効率だけを求めるのではなく、プロセス、一つひとつの積み重ねを大事にしていく教育」がホリスティックな教育実践というものです。1996年に会った中学校2年生たちが高校3年生になったとき修養会にまた呼んでもらいました。幸せなことでした。5年の歳月を経て彼女たちが中学生の時の面影を残して一段と大人になった状況の中に出会わせてもらったんです。彼女たちは中学2年生の時よりさらにたくさんの悩みや難しさを抱えながらも一人ひとり自分なりに考えながら答えを出しながら生きていることがよくわかってうれしかったです。彼女たちが卒業文集に書き記してくれている言葉に中学校の修養会で習った言葉が一杯出てきます。でも彼女たちはそれがそこで習ったと忘れていたかもしれません。しっかり自分の言葉になっているんです。血となり肉となり、どこでそんな言葉を覚えたか忘れてもいいんです。彼女たちの生きる力になっていることがうれしいことでした。

最後に何でも聞いていただきたいと思います。長い間、ご静聴いただきありがとうございます。

## 【質疑応答】

**司会** やっぱりようしゃべるでしょう。

**金** 私も経済至上主義に縛られているので、与えられている時間の中でちょっとでもきちんとたくさん手渡さないとあかんという貧乏根性が、ようけしゃべらせるんです。

**司会** ホリスティックということと、出会いの3つ目、超越的な存在はかかわり  
そんな気がします。

**金** 臨床教育を考えていく上で、私にはうまく説明できないけど、重要な課題で  
す。こんなふうにも考えています。教師をやる時に、神か仏かでも信じてないと  
やってられへんやろうと思うことがしょっちゅうある。なぜなら自分の目の前の  
子どもが、荒れまくって、冷えまくって、無茶苦茶やって「こんなやつ、ど  
うなるか」と思いたくなることがあるんです。でも私にはね、「神様がこの子ど  
もをつくった」と思うと、その頭がもうちょっと冷えるんです。「そうか。私には  
理解できへんけど。こんなん、あんたがつくったんか」と神さんに不平不満を言  
うんですけど。「この子にも神様がつくった、生まれた時から神様が与えたたくさ  
んの可能性や力があるんや」ということは、私の中では神様でも信じなければ思  
えない。「どこ見て、この子、信じろというのん。どこ見てこの子に可能性あるの  
ん」と思うんですよ。教師とか対人援助者は時に人間を超える何かを信じないと  
やってられへんというのは、今、介護の現場に長い期間おりますので、リハビリ  
にかかっている対人援助者を見てもつくづく思うんです。リハビリの病院でみ  
る患者の方々は本当にもう可能性がないかもしれないと思ってしまう。私の家族  
がその一人ですから、家族が「ようになってほしい、何かの可能性でも」と思いま  
す。でも信じたい家族であっても信じれないことが一杯ある。「もうあかんかもし  
れん。だめかもしれん。ようなることはないんちゃうか」。でもものすごい優れた  
リハビリの名医がどんな状況にある患者にも希望を持つんです。あれは神様を信  
じてないとできないと思います。目の前を見たら「どこをどう見て信じるのやろ  
う」と思いますもの。そこが超越する何かを信じる対人援助者においての一つの  
重要な命題と思えます。

別に神様でなくてもいい。キリスト教でなくてもいい。弘法大師でも宇宙のエ  
ネルギーでもいいんだけど、人間を超える何かを信じることは大事かもしれない  
と思います。

**司会** そこらへんは対人援助者の現場と交流したいところですが。

対人援助者自身のケアについて。

**金** 思春期の子どもにかかわる大人はズタズタに傷つけられていますから、ケア

が必要です。そういう対人援助者は自分もまた心の栄養、身体の栄養をとっていないとあかん、もらってないとあかんと思っています。心の栄養は人からもらうことができる。一つは、自分たちの周りに認めたり、褒めたり、慰めてくれたりする人が必要です。ケアしている人にはとりわけ必要です。でないとなげきまします。でも今のあらゆる現場で見て、人からもらってないんですよ。学校の先生の研修会で聞くんです。「皆さん、職員室はこういうものをもらえる場になってますか。戻ったらほかほか気持ちがあたたかくなるような場ですか？」と聞くと、皆、大合唱していいいます。「違います」。あたたかいどころか、職員室は冷蔵庫です。そこに行ったら「サブーツ」というところですよ。別のところで紹介すると「冷蔵庫なんてキムさん、ましですよ。うちは製氷器です。入ったらカキンと凍ります」。それが今の対人援助者を取り巻いている現状です。心あればあるほど燃え尽きさせられていくことが頻繁に起こる。燃え尽きないように、その対人援助者をケアすることは重要です。心の栄養は人からもらうことができる。

トレーニングで言うと、自分で自分にあげることもできるんです。自分で自分を認める、褒める、自分で自分を慰めることも有効です。もう一つ、自然というものも人間を裏切らない。自然からもらうこともしばしばできるんです。ところが都会生活を長くやっていると自然との関係を断ち切られている人が多い。自然の中に入っても栄養をなかなかもらえない。あわただしく携帯と時計が気になって、自然の中にもゆったり過ごす、癒されることがしにくくなっています。でも本来は自然からもういっぺん栄養をもらい直すことができます。

これに加えて神様、仏様を持っている。自然に含めて考えてもいいんですけど、自分で自分を褒めるだけでなく「神様はきっとこんな私をわかってくれてる。周りの誰もわかってくれへんでも神様だけはわかってくれている」。これは大きな救いです。まずは人からもらう。自分で自分にあげる。自然の中に時に身をおいてケアされる。対人援助者のためには必要なことです。

学校の尺度と家庭の尺度に差があり、子どもがその狭間におかれることがあると思います。その場合、子どもはどちらを信じていいのか迷うことがあると思うのですが。教育現場をまわってみてどのように感じるでしょうか。

**金** 学校の先生が「学校はこの経済至上主義ばかりなんです」と。その先生の

いるところは同和教育推進校でそれなりに同和教育、人権教育を大事にせなあかんと考えている学校です。その学校でさえも経済至上主義の基準でおおわれています。自分一人違うことを言うと言っていけないのでストレスを抱えています。学校はますます加速度がついています。家庭も皆そうです。だから現在の子どもの生きにくさ、生きづらさがあります。「はようせんかい」「きちんとせんかい」という大人のまなざし。心の栄養になるのはあたたかい関心と眼差しですが、厳しい関心やったらない方がマシなんです。その方が休息がとれる。大人のまなざしで厳しく見られる世界ばかり生きている子どもたちにとって休息する場所がない。コンビニの前くらいしか。たむろしていたら「あの子らまた悪いことをやってるのと違うか」と厳しい眼差しで不審がられて子どもの居場所がない。

学校と家と両方からいっぺんにやられて立つ瀬ないんですよ。立つ瀬ないやろうなと思います。大人もそんな評価だったら生きていけませんもの。生きるの、やめたいと思います。今の子どもの生きにくさに凝縮されている。大人たちもそれでいいと思っていないけど、そうやってしまっている悪循環はますます深みにはまっている状況があります。

中には気がついて、うちの家ではそうしたくないと気がつくお父さん、お母さんもいる。でも難しいのは、子どもは家の中だけで生活しているわけではないんです。家の中ではそういう価値観でも外に出るとそうじゃない。「うちの家はおかしい」と言います。「うちの家は速く、きちんとやらんでいいねん。対話を大事に手作り大事にしてやっていく」と言うと、「うちの家はおかしい」となる。子どもにとっては外の価値観の方がメジャーなので、混乱や葛藤が新たなストレスになっていく。こういう考えから脱出していくのは一人二人ではできない。地域ごと、地区ごと丸ごとで取り組んでいかないとあかんです。難しい。

**司会** 金さん、主にどこで活動しているのですか。旅鴉なんだけど、直接思春期の子どもたちの学校教育の中になかなか入り込めないでしょう？

**金** クラスで講演するとか全校集会でやるとか、依頼がくるとウンとなるんですよ。中高校生の全校集会になると、皆、凍りついているのがわかっているから。エネルギーがいるなど。でも行くんですけどね。秘訣ひけつがあるんです。

**司会** 秘訣を教えてください。もう一つはホリスティックな教育実践をする教師

自身をいかに養成していくかという活動はどうですか？

**金** ファシリテーターをどう養成するか。ファシリテーターには誰でもなれる可能性は持っている。しかしそのままではなれない。経験とか体験、学習を積み重ねることが必要で、加えてファシリテーター養成は徒弟制度でしかできないのではないかと思います。徒弟制って教育学の中に出てくる言葉なんですよ。師匠が「お前を弟子にしてやる」と決めるのではないんです。弟子の方から「この人を師匠にしよう」と思ってつくれる関係です。あらゆる学びの場でそうでしょうが、落語とか芸術の関係を見るとわかるんです。師匠と一緒に生活し、共にしながら考え方、やり方の普遍的なものを身につけていく。通りいっぺんマニュアルを学んだってあかんのですよ。使えない。私に一人、「弟子や」と言うてる人があるんです。「鞆持ちをする」といって、私のワークショップに5、6年もついてたんです。一回も鞆なんか持ってくれたことないですよ。その彼女が今年、武庫川女子大学の臨床教育学で修士論文を書き上げた。「ワークショップにおけるファシリテーター論、金香百合を分析する」。すごいですよ。面白い論文でしたけど。彼女は「他の人には見せへん。墓場まで持っていく」と。ケチなんですけど。6年にわたる膨大な研究とビデオ起こしをして、金香百合がワークショップで何をやっているかを書いている。それを見て、自分でも興味深かったです。「へえ、私ってエネルギーをこういうやり方、あり方で放出してるのか」と改めて再確認しました。ファシリテーター養成は体験学習でしかできません。

**司会** 手間暇がかかる。大量生産はむりだ。

**金** そうそう。経済至上主義ではやっていけません。大方、人間にかかわるものは何でもそうなんです。経済至上主義で即効性のあるやり方でマニュアルチックにできるなんて思ったら大間違いです。人間にかかわるものはおよそ、どれもこれも経済至上主義でない価値観でやっていくしかない。シコシコと積み上げながら。そんなふうに思います。

**司会** 社会的には要請されることだと思うので、それだけにジレンマですね。対人援助者の質的分析をしてみたいなと思います。「徒弟制」という言葉を使われましたが、養成するという意味では普遍的なものがあるのかもしれない。援助者になっていくプロセスに共通なものがあるかなど。質的分析ができるのではな

いかと思います。それは吸収したり加工したりする力なんです。師匠はどこかにいるんです。それは見えないかもしれないけど。On the shoulder's of Giants、巨人の上で踊っているに過ぎないような。それが世代をつないでいくという意味ですが。今の時代は徒弟制も現場で加工され、最先端でされているのでしょくけど。

これで終わりたいと思います。金さん長い間、ありがとうございました。